

対人援助におけるスーパービジョンへの一考察

市 東 賢 二

Shito Kenji

はじめに

スーパービジョンとはソーシャルワーカーの行う支援技術の一つである。厳密な意味でのスーパービジョンが実際の福祉現場で行われているかどうかということはさておき、たとえばベテランの職員が新入の職員にアドバイスをすることはあるだろう。また、そうした助言は職員だけでなく、実習している学生がその対象であるかもしれない。

スーパービジョンとは相澤によれば「少しでも『より広い視野』で『卓越したみかた』ができるようにするための『人育て』の一方法」なのである。日本の社会福祉の支援現場において、そうしたスーパービジョンの専門家はなかなか確立しにくいといわれている。現場に入っしまえば経験の深い浅いはともかく、それぞれがケースを抱え、日々の支援活動に忙殺されてしまう。そうであればこそ、サービスの質の向上、それは言い換えれば利用者にとっても、援助者にとってもよりよい援助を求めていくことであり、そのための問題解決の筋道やヒントを見つけていく集団的活動がスーパービジョンであるとも言える。

一方で対人援助における間接的な支援の中で啓発的・支援的な役割を持つコンサルテーションの有効性も近年指摘されるようになった。スーパービジョンにせよコンサルテーションにせよ専門職同士の専門性をより有効に発揮するべく設けられる、いわば専門職のための支援技術であるといえるだろう。しかし、専門職のための研修会やカンファレンスなどにおいて、それらを具体的に進めていくことには困難が伴う。その要因の大きなものの一つは、単純にいえばそれらを実行できる専門家がないことである。しかし、このことは視点を変えることで回避することが出来る。グループスーパービジョンという方法がその一つである。

本論においてはスーパービジョンを原理的に捉えかえし、社会福祉の現場において実行可能なグループスーパービジョンを方法論的に考察することを目的とする。

1 助言と指導～支持的援助への理解～

スーパービジョンはその機能や形態に応じていくつかの区別があるが、その主なものをあげておくと、まず機能としては主に次のようなものがあげられる。

- ① 教育的機能(援助技術などを教える)

- ② 評価的機能(日常業務や福祉実践に対して意味を考える)
- ③ 支援的機能(ワーカーの仕事や態度についての心理的サポート)
- ④ 管理的機能(施設の管理運営についての指導)

の4つの機能である。それぞれの機能は純然と区別されるわけでもないが、目的に応じた機能の意味を位置づける必要があるだろう。また、このようにそれぞれの機能を断じてしまうと、機能優先の立場からどうしてもトップダウン式の意味合いを持たせてしまうことが多くなる。米澤によれば「スーパービジョンの目的が、職場における研修・研究を媒体として…略…社会福祉援助技術の質的向上を図ることにあるとすれば、その目的達成のための方法として、グループスーパービジョンに類した『民主的職員集団づくりを志向した、職員研修』が考えられる。」ⁱⁱこれは、従来スーパービジョンは経験の深い社会福祉専門職員から経験の浅い社会福祉専門職員に対して援助指導を行う個別スーパービジョンの形態が多かったが、専門職一人ひとりが援助実践に主体的にかかわり、集団として援助実践の技術が共有され展開される必要から生じた形態である。この方法は、援助技術の伝達という意味のみならず、アドバイスが単なるオーダーでなく共有と支援という広がりを持つことから、ケースに困難を抱える専門職への支援という意味も強く持つ。また、専門職への期待や要求は今後ますます増大することは、制度的にも実際の支援現場の実情においても火を見るより明らかである。

こうした背景において今後ますます深化が期待される専門職の行う対人援助は、個別に実施され工夫される援助と、それらを問い返し吟味するスーパービジョンが両輪として機能することが求められる。特に専門職を目指す学生や若い専門職の中には、介護や保育といった技術が、あたかもテクニックとして実在するかのように錯覚している者や、それを習得することが専門職になることであると誤解している者もいる。対人援助の技術は、確かに部分的にテクニカルに修得しなければならないものもあるが、実際には利用児・者が変わればやり方やアプローチが変わり、臨機応変な対応を求められることがほとんどである。一義的なテクニックでは通用しない現実と、臨機応変さが交錯する中で自らの仕事のやりがいを見失ってしまうどころか、いつ終わるともしれぬ時間に身をさらしすぎてしまい人間らしい感情すら失ってしまいかねない。社会福祉的な対人援助が利用児・者を支える現場において他職種との連携のみならず、職場内での連携がチームアプローチとして脚光を浴びているのもそうした背景がある。

逆にこうした実情が物語っているのは各々の専門職が個別にかかわるケースは複数の専門職からなるグループの支援に支えられているということである。しかしグループとしての支援のあり方や援助の意味についてはあまり触れられていないか、自明のこととして概念化されてこなかったのである。このことは社会福祉の対人援助が社会的な重要性をまわしながら、職人的な技術へと偏りやすく、技術自体の客観化(共有化)を阻む要因になってきたことを表している。つまりあくまでも対人援助技術の伝達は個別な感覚としての伝達であり、利用児・者へのかかわりを意味として客観化し伝え合うこととして成立しなかった。当然どのようなかかわりにどのような効果や意味があったのかは吟味されていない。さらにそれぞれの抱える困難さやより良い支援のための工夫は、専門職同士のいわば個人的な付き合いの内に解消されていた

のである。

こうしたことからスーパービジョンを捉え返すと、社会福祉実践における利用者への支援活動の中の管理という意味も少し変化してくる。先ほどのスーパービジョンの機能の中の管理的機能にも管理という言葉が使われているが、この管理という言葉はマネジメントとだけ理解されることには注意が必要である。マネジメントとしての管理とは従来からよく使われる、いわば物品管理という意味での管理であり、ある意味では保存状態の適正管理である。最近話題になったドラッグーのマネジメント論は、こうしたモノ的管理へ問題提起したものである。モノ的管理という意味とは別に、もう一つ社会福祉援助の実践においては利用者の生活管理という意味合いもある(当然、専門職の生活管理も)。これはスーパービジョンの必要性の一つに数えられることであるが、専門職がケースに忙殺されてしまうあまり利用者から離れてしまうか、のめり込み過ぎてバーンアウトしてしまうことを防ぐという意味もある。どちらの場合もそれぞれにとって、現実的な社会性の実現という意味から離れてしまう。

管理のもう一つの意味は、利用者や専門職のある状態の管理をさすマネジメントに対して、状況や利用児・者を含む環境の管理を意味するアドミニストレーションである。これはたとえばマネジメントが点か線としての問題意識だとすると、面としての問題意識だといってもいいだろう。つまり状況という広がりを持った管理のことである。利用者であっても専門職であっても現実的な社会性という広がりを生きる人間である以上、そうした生への支援がアドミニストレーションという言葉で表される。

このようにして見てみれば、対人援助におけるスーパービジョンは教育・評価・支援・管理とそれぞれ力点は状況に応じて違っている。しかし、そうであるが故に社会福祉専門職がよりよい支援を行える環境を整え、各々の援助技術向上の場としてのスーパービジョンの必要性は、ともすれば専門職それぞれの個別な体験知を共有し、客観化し伝達しあう場として明確化する必要がある。

2 インタビューとしてのスーパービジョン

上述したようにスーパービジョンは社会福祉専門職員がその援助経験を深め、共有することで「少しでも『より広い視野』で『卓越したみかた』ができるようにする」⁴⁴援助技術である。それは同時に社会福祉援助技術の基礎的技術としての他者理解の方法でもある。こうした基礎的な技術を支える基盤としての能力はabilityではなくcapacityである。社会福祉援助技術が手続き上の単なるtechniqueではなく、artであると繰り返し述べられているということは、その技術が他者理解という内容を相手の分析を意味することだけでなく、共感し受け入れることとして踏まえられているということにある。つまりスーパービジョンにおいて、それは他者への洞察という基礎的技術の深化としての研修技術であるとも言えるだろう。

スーパービジョンがインタビューであるとは日本人であるわれわれにとっては理解しにくいことである。なぜならわれわれの知るインタビューとはテレビでよく見かける、あの敵意と覗き見根性まる出しのインタビュアーと、それに晒しものにされているが故の無責任と非常識

の塊のような回答例に慣れさせられてしまっているからである。しかし、利用児・者とかかわり、面談し、さらには専門職同士または専門職と学生の間でおこなわれるような専門的なかわりにおいて専門職に必要なものは、上記とは全く無縁な相手へのあたたかくも厳しい洞察力である^{iv}。

援助者が相手に対して様々な形でその相手の抱える問題解決のための助言や示唆を与えることは日常的な支援活動の中によく見られる。こうした日常的な支援活動において、支援者に求められることは、社会資源や各種制度に精通していることはもちろん、その問題を抱えた相手にどれだけかかわることができるかということである。ここでのかかわるといことは物理的な時間のみならず、相手の本来の姿をどれだけ共有できるかということを意味している。相手の話を聴きながら本来の姿を共有するプロセスが、言ってみればアセスメントから始まる一連の支援となる。利用児・者への直接支援である保育や介護であろうが、家庭・家族への相談支援であろうが、利用児・者の世界を共有しつつ支援を進めるとい現実是不変である。しかし、実際のそれらのプロセスは専門職の個別の体験の積み重ねであることが多い。その意味ではこうした世界を共有しつつ支援を進めるといった対人援助のための技術は、そのかわり自体の吟味や問い返し、あるいは概念化といった意味で現実的公共性の高い技術とはいえない。

個別の体験が蓄積されるということは対人援助においてはとても貴重な意味をもつ。しかし、そうであるが故にその貴重な体験を背景としたスーパービジョンは、単なる体験主義に根差した super(超越的な)vision(視点)からの助言や指導になりがちである。言い換えるなら、閉ざされた感性に基づいた主観主義的体験から他者の経験の粗を捜し、その人ならではのかわりを披歴してしまうため、その話を聞いている側は全く自分のこととして聞くことはできず、スーパービジョンを受ける側のスーパーバイザーは自らの体験を深めることができない。結果としてその人自身の貴重な体験の意味も概念化されていないため、雲をつかむような話を聞かされるだけになってしまう。

スーパービジョンが超越的ではなく、超越論的な対人支援として成立するためにはスーパービジョンする側としてのスーパーバイザーは、自らの体験とスーパーバイザーの体験とをつなぐための言葉を持っていることが求められる。この言葉は単なる専門用語を知っていなければならないということではない。専門的なツールとしての言葉ではなく、専門性を共有するための場を提供する言葉である。専門職は相手が専門職であれば当然、相手が利用者であれば猶のこと、自らの体験により深められた専門性を相手の体験知へと繋げることが必要になる。スーパービジョンとは相手を幻惑する呪術であってはならないのであり、他者への深い洞察に基づいた、直接的間接的な相手の環境世界を整える技術である。

つまりこうした一連の支援活動は程度の軽重はあれ、専門職同士のスーパービジョンのみならず、利用者への相談支援においても同様のこととして行われる。対人支援においては、必ず利用者やその家族からの聴き取りが行われる。専門職の専門的支援は利用児・者にとって、訳もわからず幸せな結論が実現されるといった手品のようなものではなく、地道なかわりから積み上げ、相手のエンパワメントに働きかけることである。こうした支援を支える聴き取りに

における重要な要素としてインタビューがある。相手からの聴き取りそのものをインタビューということもあるが、その際にまったく無意図的にインタビューをするということはない。このことが、インタビューそのものを難しくしてしまっている。「精神療法家(つまり、すべての対人援助者)は聴くことができなければならない」^vとして、聴くことの難しさと重要さを述べたのはE. フロム-ライヒマンであった。彼女は「聴くことができるということ、および他人のことをそれ自体として受け取り、おそらく邪魔になるようなしかたでしか思い出されない、自分自身の問題や経験の線に沿って反応したりしないことは、特別に訓練されないかぎり、ほとんど誰も実践しえない対人交渉のわざ(アート)である」^{vi}と述べることで、インタビューに含まれるその意図の中に援助者側の防衛機制が忍び込むことを警戒していた。これは、先にも述べたとおり専門職がその技術を個別の体験の積み重ねによってのみ発揮しようとするれば、そのことがインタビューに投影されやすくなることを指摘している。当然利用者を理解しようとするより目の前の課題解決のみに眼を奪われてしまえば、そのことが投影されたインタビューになってしまうということを表している。

その上で、相手を分かるということを端的に表したことばとして次のようなものがある。

自分自身は決して感じたことのない他人の感情のただ中へ自己を投入する能力を、これほど必要とする仕事は他に存在しないのである。^{vii}

この文章は日本では看護学の創始者として有名なF. ナイチンゲールの『看護覚え書』の補章に出てくる一節である。この一節は対人関係を専門性とするあらゆる領域で通用することである。対人援助における相手をわかるということが専門職者の思い込みや自らの知っている世界のみで相手にかかわるのではなく、相手その人のありのままにかかわっていくことの重要性を端的に述べたものであるといえる。言い換えるならば専門職自身の個別の体験の積み重ねのみによる超越的視点(super vision)から相手にかかわるのではなく、相手の世界へコミットメント(自己投企)することにより相互に共有された視界(inter view)へと拓かれていくことが重要なのである。

しかし、そうした相手をわかろうとすることは現実的には容易ではない。ナイチンゲールやフロム-ライヒマンが述べたことは、専門職者が自ら相手の世界へ飛び込んでいくこと、損得や利害ではなく実存としての利用者やクライアントへの信頼そのものを実現していくことであると言える。

3 あいだとしてのスーパービジョン

スーパービジョンの現実的問題として、その難しさは援助者同士のかかわりの中に生ずる心理的な問題もさることながら、逆説的であるが、援助者の目の前に横たわる課題や問題を解決するための一つの方法であるということである。こうした問題解決への糸口を探っていく機能として教育的機能や支援的機能を有効に具体化していく必要がある。その具体化への方法が民

主的集団作りとしてのスーパービジョンである。この方法はもちろん経験豊富な専門職が、自らの臨床的な知を他者へ伝達することによって、つまり実際に行われた支援の体験を概念化するということであるとともに、専門職員同士が、同様の悩みを持つもの同士として、その課題を概念化することでもある。こうした場合に注意しなければならないことは、悩みを共有し、解決策の糸口を提示してくれるその集団(またはスーパーバイザー)に対して、自-他未分化な依存性が生まれてしまうことがあるということである。民主的集団としてのグループスーパービジョンを展開するということは、各々が主体的に参加し自立-依存の両義性を理解しつつスーパービジョンに参加するということである。その意味では参加者各々が「その人の能力、資質に基づいて参加することが条件となる。すべての職員が参加する方法を如何に見いだすかということ」¹⁴⁾によって成立することがらであるといえるだろう。

こうしたことは専門職それぞれが行う支援において、経験や立場などによる違う次元を生きるのではなく、各自の行う支援に対する深みとしてのつながりとして、支援におけるかかわり自体の実感を表現できることと、変容する将来を相手に実感あるいは予見させることである。スーパービジョンに参加している専門職同士が、同じ悩みや困難さを共有するということは、同時にそれぞれの体験としての違いもまた明らかにすることなのである。相手の体験に同感し、同一化を体験することは、後に述べるようにお互いを支えあうこととして大切なことではあるが、むしろ支援を行うそれぞれの専門職としての違いを明らかにすることとともに、今後の支援に向けて具体的な将来が実感できることに意味がある。スーパーバイザーはスーパービジョンにおいてスーパーバイザーが、そうしたお互いのあいだを実感できるよう促す必要がある。お互いの大切な繋がり体験が、専門職一人ひとりとしてのあいだを生きる体験へと変容するプロセスがスーパービジョンの難しさである。

また、社会福祉の現場で生ずる様々な問題は、実際には社会福祉領域に限らず医療や心理といった多くの職種がチームアプローチ的にかかわっている。その意味ではコンサルテーションという方法をとって、社会福祉にかかわる他の専門職による援助指導や助言を必要とするところもあろう。コンサルテーションという方法をとることによって、専門職としての知識や経験を広げるということも可能である。

スーパービジョンやコンサルテーションが、社会福祉援助技術として他者への支援をすることと目的が合致しているとすれば、支援の公共性や客観性といった社会的意味を問うことである。それがいわゆる社会福祉援助の評価として位置づけられる。これは一概には言えないが、たとえば一つひとつのケースに即して記述されるケース記録やその他の報告書などが、公共性を持つ社会的評価として用いられることとなる。

しかしここで問題となるのは、そうした記録や報告書が、必ずしもケアマネジャーやケアワーカー、あるいはソーシャルワーカーの援助の実態や有効性に寄与しているとは限らないということである。もちろんこうした問題が棚上げされているというわけではないが、まだまだ実践的な研究としても立ち遅れていると言わざるを得ない。そこでもう一度社会福祉援助技術の評価ということの意味を捉え返す必要がある。上述したとおりスーパービジョンには日常業務

や福祉実践に対して意味を考えるととしての評価的機能があるとされている。

現場での実践を行うものの性として自らの行為に対する評価は、楽観的自己欺瞞であるか、嗜虐的自己否定であるかに陥りやすい。その意味でいわゆる社会的評価につながるものを積み上げていくということもあながち無駄なこととはいえない。しかしそうした消極的な意味だけで評価というものが成り立っているわけではない。そもそもなぜ自己評価が自己欺瞞や自己否定を生み出してしまいがちなのかということ問い返す必要がある。

先に社会福祉援助技術はその専門性として「人にかかわる」ことが核となると述べたが、そのこの意味を一言で述べるならば、社会福祉援助技術を行う専門職者はその態度として臨床的であること[※]が求められるということである。この態度として臨床的であるということは、基本的に人と人がかかわりあう現実という意味で客観的なのである。自己評価が自己欺瞞や自己否定につながりやすいことの原因の一つは、その評価方法がそのかかわりそのものを放棄し、主観主義的内省に偏りすぎてしまうことである。グループワークまたはグループスーパービジョンという方法をとることの意味は、この主観主義的内省に基づく自己評価から客観化された自己評価へと転換する一つの訓練の意味も持っている。客観的な評価という言葉で意味される客観的とは、主観を排除したという意味では決してない。というよりも主観を排除すること自体がそもそも不可能である。むしろ、客観的という意味は主観主義を排除しようとすることであり、共同主観的であろうとすることであるといえる。

日本におけるグループスーパービジョンの有効性は、スーパービジョンが必要であると叫ばれる以上に重大な意味をもつ。それは一つには現在の日本の社会福祉領域の現場において上司から部下へ、またはベテランから新人への助言や相談指導ということもあり得ても、スーパービジョン自体が(その語用の是非はともかく)根づいていないからである。もっともそのアドバイスや相談指導の質によってはスーパービジョンとなんら変わらないことが行われているのもまた事実である。

しかし多くの場合、個別のスーパービジョンとグループスーパービジョンが「スーパービジョン」という用語上の親和性を保つにとどまり、意味的な繋がりをもたないこともスーパービジョンが根づかない大きな理由の一つである。社会福祉現場でおこなわれるさまざまな研修においても、また専門資格養成のための教育現場においてもグループワークは一般的な方法として用いられるようになった。研修や養成課程においてグループワークを用いることの意味は何か。

4 自己覚知としての自己評価

社会福祉対人援助における評価が、単なるケースの途中経過や結果の報告にとどまらないとすれば、それは臨床的な自己評価としての意味があるといえる。自己評価とは「ややもするとクライアントとの関係に先立って『覚知された自己』とその『自己』に基づく援助関係の実現」[※]とその援助に対する自己による評価であると理解されやすい。こうしたことは対人援助における自己覚知の理解として、偏りがちな主観主義的(個体主義的)自己というモノによる自己覚知から導かれやすいことである。

しかしながら繰り返しになるが、社会福祉対人援助における基本的な態度は臨床的な態度である。自己覚知といえどもそれは同様である。ここでいう「人にかかわる」ことを専門性として発揮する専門職者の基本的な条件としてフロム・ライヒマンが「聴くことができなければならない」としたことは、その態度として閉じた自己のありようによっては発揮されないのである。フロム・ライヒマンが特別な訓練と述べるのは、まさしく主観主義的な理解に終始してしまいがちな自己のありようを客観化する訓練ということに他ならない。

こうした主観主義的な評価に陥ることなく自己覚知を促す方法としてグループワークが用いられることも少なくない。グループワークを用いることによって、先に指摘した専門職自身の体験のみによる、いわば主観主義的体験主義を回避しようとするわけである。しかしスーパービジョンにグループという形態を持ち込めば、それがそのままグループスーパービジョンになるというわけではない。スーパービジョンという土壌の開拓の難しい日本においてはグループによるグループスーパービジョンは有効な手段である。しかしグループワークをおこなうということは注意しなければならないことがある。特に専門職同士あるいは養成課程に学ぶ学生同士のグループワークでは、上のような趣旨でグループワークが用いられる。しかし、こうしたグループワークは、ともすればお互いの体験談の報告会によるグループ参加者それぞれの体験の共有にとどまってしまうかねない。もちろんお互いの体験を通して、自らの体験を振り返りつつそれぞれの専門職者の孤立感を緩和するというには大きな意味がある。しかしこのことはグループワークの始まりにすぎず、このことだけにグループワークの主眼を置いてしまえば、グループ参加者相互の共時的共空間的な体験による共有感覚からの集合主観にとどまり、そこでの体験はグループ内体験として、異様な高揚感のみが支配することになる。ちなみに1970年代から90年代にかけて様々なグループワークが行われたが、その中でグループホリックとも言うべき人々が現れた。それはひとえにこの高揚感が忘れられず、その陶酔的なグループ内体験にすがろうとした人々である。この陶酔感から覚めてしまえば、こうしたグループワークというアプローチ自体から身を引き、客観化のプロセスをあきらめ、結局また主観主義あるいは客観主義へと戻ってしまう。

グループ内体験による集合主観はその根源を個体的個人のまさしく個別の体験に置く。たとえそれがほかの参加者の体験であったとしても、「あ〜っ、あるある」と言いつつ自らの体験にいつの間にか置き換えてしまう。それぞれの体験を同じか似たものとしてつなげる役割はあるが、その意味の違いやその体験の概念化には至らない。グループ内体験は、そもそもつながり体験による安心感を得るにとどまるため、グループワークとして支持的なかかわりを構成する場ではあるが、スーパービジョンどころかインタビューにすらなっていないのである。客観化された臨床的態度への気づきのためのグループワークであるならば、このグループ内体験をグループ体験^{xi}へと変容させることが重要である。

この客観化するという意味での臨床的な態度は自らにのみ向けられることではなく、専門職者がかかわる利用児・者にも向けられることである。むしろ利用児・者と臨床的にかかわろうとすることにおいて、その臨床性が「人にかかわる」専門性、つまり応答性(responsibility)とし

て発揮されるといえるだろう。利用児・者とのかかわりにおいて発揮される応答性が、専門職自身の生きられた自己の覚知を促す。自己反省的に再構成されたリアリズムとしての自己覚知ではなく、生きられた関係からのアクチュアルな自己覚知こそが、専門職自身の生きられた支援の評価なのである。このことは実際の支援の現場において、利用児・者またはその家族から感謝されたり、専門職の一言に傷つけられたとして発言される専門職の言葉の多くが、専門職自身にとって身に覚えのない言葉であったりするというようなケースが散見されることからわかる。このことは実際にその言葉が発せられたかどうかは問題なのではなく、そうした言葉として専門職と利用児・者の現実的なかかわりが象徴的に表れたものなのである。こうした言葉は、なかなか結果としての評価が見えにくい社会福祉の支援現場におけるプロセスとしての評価である。

こうした臨床的なかかわりは自覚のあるなしにかかわらず、対人支援の現場では自然に求められていることである。そしてその意味は、かかわりを生きる利用児・者その人を支援するというに他ならない。つまり社会福祉の支援の具体的な姿は、その実態としてすでに個別的な生を生きる利用児・者への社会的支援としてしか実現しないということである。現在ではもっぱらソーシャルワークと呼ばれているが、社会福祉援助技術の本質は従来使われていたソーシャル・ケース・ワークであると考えている。それはもちろんその定義にも述べられていることであるがⁱⁱⁱ、特に高齢者支援のための援助は個別な支援から家族にかかわる支援、そして地域への支援を徐々にその範囲を広げていくことが求められる。これらのことはどこまでが個別な問題でどこからが社会的な問題であるかという線引きはされない。社会福祉援助技術がそもそもソーシャル・ケース・ワークであると考えるのはまさしくこの点にある。

社会福祉の具体的な支援の実態においては「一つひとつのケース」と述べるとおり、それぞれの個性性に眼がいつてしまうあまり、家族や社会資源との連携ましてや同職者との連携などに眼を向けることが難しくなっているのも現状であるが、実はそのことが同時にケースを扱う専門職者の個体化を導いているともいえるだろう。

確かにそれぞれの事例は、一人ひとりの利用児・者や家族の最大限の利益に対して支援することを目的としているし、実際の支援もそのようになされている。しかし、こうしたケースの個別性と「クライアントの抱えた問題を(援助者の)日常的なレベルでの主観的・個人的世界に閉じ込めておく」ⁱⁱⁱⁱこととは別の問題である。「少なくともケースワークの中で客観的であるということや客観的理解ということによって指し示す内容は、日常において主観的であるということとを排除するのではなく、それを明確化していくことから始まる」^vのであり、それぞれの具体的な事例においては「当事者の胸のうちや仲間同士の間だけにそのままとどめておくのではなく、適切な機関や専門職の人に援助の要求提示することにより、互いに問題の明確化を図り、問題解決の方向性を模索していく過程そのもの」^{vi}であるといえるだろう。それゆえに社会福祉学的対人援助の専門職者は臨床的客観性が求められるのであり、それにまつわる社会性が求められるといえる。こうした臨床的客観性や支援の社会性、何よりも専門職自身のかかわりを生きる姿を取り戻す重要な技術が、スーパービジョンであると言える。

引用・参考文献

- 相澤譲治『ソーシャルワークスキルシリーズ スーパービジョンの方法』相川書房 2006
 足立徹 佐藤俊一 平岡著『ソーシャル・ケースワーク』中央法規 1996
 早坂泰次郎『人間関係の心理学』講談社現代新書 1979
 早坂泰次郎『現象学を学ぶ 患者の世界とナース』川島書店 1986
 日野原重明編『アートとヒューマニティ』中央法規 1988
 フロム-ライヒマン『人間関係の病理学』早坂泰次郎訳 誠信書房 1963
 米村美奈『臨床ソーシャルワークの援助方法論』榊みらい 2006

-
- i 相澤譲治『ソーシャルワークスキルシリーズ スーパービジョンの方法』相川書房 2006 p.3
 ii 川田誉音他編集『改訂 社会福祉援助技術演習』榊みらい 2002 p.152
 iii 前出
 iv こうしたことについて早坂は次のように述べる。「看護婦やカウンセラーが、患者やクライアントの『こころ』あるいは『気持』へのケアの専門家であることが求められるかぎり、それはこうした人びとの一人ひとりが、自分の前の患者やクライアントの本人以上に、少なくとも部分的にはその人のこころや気持がわかることができなければならないことを意味している。もっと具体的にいえば、本人は気づいていない、ひそかなもの見方や感じ方の傾向や癖、歪曲や欠落、防衛や合理化、自(己)愛や自己嫌悪、人間不信や自己不信、完全主義の傾向や対人恐怖などを見てとり、適切な時と状況において端的・明確に相手にそれを指摘できなければならない。」(早坂 1986 pp.154-155)
 v フロム-ライヒマン「5 精神療法家に必要な人間的職業的条件についての覚書」『人間関係の病理学』早坂泰次郎訳 誠信書房 1963 p.77
 vi 同上
 vii フロレンス・ナイチンゲール『看護覚え書』湯楨ます他訳 現代社 1968 p.217
 viii 川田誉音他編集『改訂 社会福祉援助技術演習』榊みらい 2002 p.152
 ix 早坂は臨床的ということについて次のように指摘する。「臨床的と訳されてきた clinical という言葉はもともとベッドを意味するギリシャ語に由来するのですが、…略…それは全人格を投入して病室という場に患者と『ともにいる』ことなのでした。…略…『臨床心理学』という言葉もありますが、この場合の臨床もやはり『治療的』の意味が圧倒的です。…略…むしろ一人の人のために自己自身を投入し、その人と全人格を傾けて『ともにいる』態度という意味なのです。」(日野原 1988 p.51)こうしたことを踏まえ早坂は「『臨床(的)』という語を用いる場合、医療業務の遂行の社会的場として教育、産業、行政等々の場と区別される場としての臨床(的)と、一人の人のために自己の人格を投入する態度としての臨床的ありようについての相違が明確になっていなければならない」(同上 p.52)と述べる。
 x 米村 2006 p.28
 xi 早坂泰次郎 1979 p.115
 xii M. リッチモンド『ソーシャル・ケース・ワークとは何か』(小松源助訳 中央法規 1991)他を参照されたい。
 xiii 足立他 1996 p.65
 xiv 同上
 xv 同上